

お富士さん……火祭り！

本物の富士山のふもとにある北口本宮浅間神社では8月26日、27日に吉田の火祭りとして知られる鎮火大祭が行われる。この祭りは静岡県島田の帯祭り、愛知県国府宮のはだか祭りとともに日本三奇祭の一つに数えられているそうだ。

東京のお富士山で「火祭り」をやる場所は、清瀬の中里富士だけである。ここでは丸嘉講の方々が富士講を守っており、富士登山もやっているそうだ。

東京近郊には都内とは違って大きな富士塚が残っている。今回は火祭りが行われる清瀬中里富士をメインに、東京隣接の富士を巡ってみよう。

- 白子富士……川越街道沿い熊野神社境内、大きく立派。胎内巡りもある
- 下新倉富士……氷川八幡神社境内。なかなか立派。
- 田子山富士……敷島神社境内。新河岸川原を田子の浦に見立てた。すごい。
- 清瀬中里富士……清瀬中里の土盛り富士。火の花祭りは都無形民俗文化財。



みわ塾 講座 三輪主彦 (みわかずひこ)
〒173-0023 板橋区大山町 33-6 090-9827-8340
ホームページ <http://kazmiwa.web.infoseek.co.jp/>

白子富士 熊野神社境内にあるツツジの美しい富士塚、胎内巡りも

■和光熊野神社（和光市白子 2-15-47）

この神社は和光市にあるが、東京と埼玉の県境を流れる白子川の近くにあり、歩くのは成増駅からの方が便利である。今の川越街道は東埼玉橋を渡るが、ちょっと下流にある白子橋がもともとの川越街道でこのあたりが白子と呼ばれ、川越街道の宿場だった。

白子橋の欄干にはこの付近に住んでいた童謡詩人、清水かつらの「くつが鳴る」の歌碑がはめ込まれている。彼の作品は他に「叱られて」「みどりのそよ風」など多数あり、地元では童謡祭も開かれているという。

白子というのは奈良時代に渡来新羅人のために新設された武蔵国新羅郷（しんらごう）が、転訛したとされている。白子の鎮守はもともとは氷川神社であった。氷川は出雲の簸川から出た名前だから、新羅系の人の神社としては納得できる。しかし徐々に百済系の大和の勢力が大きくなると氷川社は衰微し、熊野神社の力が大きくなった。と私は勝手に推測している。次に行く下新倉富士も氷川八幡神社という二つの勢力の折衷名である。武蔵の地は大宮の氷川神社が一宮で、新羅の影響下にあった出雲系が強そうだが、どうもその勢力は徐々に侵略されていたような気がする。



■白子富士

熊野神社の鳥居をくぐるとすぐ右手にすばらしい富士塚が見える。高さは10mほどあり、都内の第一級のものと比較しても遜色ない。ただしこちらは富士の熔岩積みではなく、赤土盛りでツツジ山のようにになっている。傾斜は急で登りにくい、頂上からの見晴らしはよい。頂上にベンチはあるが、祠はなく、コノハナサクヤヒメが奉ってあるかどうかは不明。登山口はいくつかあり、お中道もある。ツツジ、サツキの頃は花見の人出賑わう。



富士講の石碑は登山口にいくつかあり、丸瀧講の方々がこの富士塚を作ったことが分かる。大きな塚の割には石碑は少ない。この塚は白子川につきだした台地の尾根の末端を整形して作ったものであることは、背後に回ってみるとよく分かる。

■胎内巡り、洞窟巡り

境内左手の高台にあるにある不動院の前から洞窟にはいることができる。富士塚には「おあな」と呼ばれる洞窟が付き物なのだが、こちらは離れたところに、長い洞窟がつけられている。

こちらはすべて富士の熔岩でできている。都内にあるお富士山は熔岩で固められているものがほとんどだが、東京近郊の大きな富士山は土盛りが多い。きっと内陸まで石を運ぶのが大変だったのだろうと思っていたら、ここでは熔岩はもっぱら胎内巡りの洞くつ造りに使われている。中に何体かの石仏があり、ロウソクが灯されており、夏でもひんやりとしている。



■白子宿 大阪

熊野神社の背後の高台は武蔵野台地であり畑が広がっていたが、今はマンションだらけ。台地と白子川の低地の境の崖には豊富な湧き水があった。昔はこの地の坂を「瀧の坂」と言ったそう。現在も水量は少なくなったが湧きだしている。この瀧を修行の場にしたのが神瀧山清龍寺不動院である。富士塚には「丸瀧講」の碑がたくさんあったので、この不動の瀧から名付けたかと思ったが、残念。これは草加の浅間神社にもたくさんあったし足立区の富士塚にも丸瀧の名前があるので、ここのオリジナルではなかった。

川越街道に出て、道路を渡った駐車場には関東ロームの下から今でも水が湧きだしており、コップもおいてある。まだ水汲みに来る人もいよう。飲んでみたが変な味はしない。昔暑い夏、街道を歩く人にとってはオアシスみたいなものだったのだろう。

■浅窪の富士塚

湧き水から川越街道を郵便局前の交差点まで戻り、成増方面に向かって右側に曲がる。この道を行くと昼なお暗く、昔の面影を残す急な登り坂になる。これが「大坂」で、もとの川越街道だ。登り切った左手に諏訪神社がある。

大阪通りをさらに行くと笹目通りの大通りに出る。これを横切って進むとくらやみ坂を下ると浅久保通りになる。ここに浅窪の富士塚がある。富士講の石碑はあるが、富士塚自体はほんの小さなもので、あまり見栄えはしない。さらにその先でさっき分かれた川越街道に合流する。次の下新倉富士へはくらやみ坂から笹目通りを吹上観音方面に歩くとよい。交通の便はない。

下新倉富士 氷川八幡神社にある立派な富士塚。

■下新倉氷川八幡神社（和光市下新倉3-13-33）

このあたりは武蔵国新羅郷であったが、その後新倉郷となった。さらにその後新座

(くら)郷となった。新座は新座市の名に残り、新倉は和光市の地区名として残った。新倉と下新倉にそれぞれ氷川八幡神社があるが、富士塚があるのは下新倉の方である。

八幡神社がもともとの名前で氷川神社を合祀し、さらに吹上八幡も合わせたようである。しかし八幡さまと氷川さまは仲良しなのだろうか。ちょっと不思議だ。

この神社には無形文化財の獅子舞が残っており、毎年10月の第3日曜に奉納されている。豊年祝い、厄除け、安全祈願など、当時の素朴な生活から生まれ、強い信仰心によって支えられ伝承された郷土芸能である。

■下新倉富士

この神社内に富士嶽神社があり、そこに富士塚が作られている。花崗岩の石垣に囲まれた土盛りの富士で、高さは4mほどである。登山道はきちんとつけられているが、人穴などは見あたらなかった。石碑は丸吉講のもので登山三十三度などがある。ここもツツジの季節には訪れる人も多いだろう。



神社脇にバス停があるが、和光市駅まで歩いて15分ほど。和光市駅の反対側には本田技研の本社がある。和光市は大企業があるので、財源は豊か。他の市との合併はご破算になった。

田子山富士 志木の敷島神社内にある巨大な富士塚

■志木

新羅郡というのは白子のあたりから志木市のあたりまでで、今の和光市のあたりは新羅郡の志木郷といったと。明治初期に館村と引又村が合併した時に、どちらの名にするかもめた結果、昔の名前を借用し、志木とした。志木郷がこの地ではないことはあとで分かったが、もう遅かった。私の考えでは、引又村に賢い人がいて、別の地であることを承知でだれもが文句を言えないような由緒正しい名を持ち出した。しばらくの間は志木ではなく志木俣とよんだ。ひきまた、しきまた、関東人が発音するとどちらかは区別できない。引又村が主導したような印象を与えていたのだ。

引又村は新河岸川の河岸の村で、大きな後背地を持っていたのでこのあたりでは栄えた村だった。今の志木市は鉄道駅の周辺が賑やかだが、昔は河川交通の要衝だったのだ。市役所がこの川岸にあるのもその名ごりなのかもしれない。

ところで、東上線志木駅は志木市ではなく新座市に属している。しかし北口のすぐ前は志木市なのでまあいいか！ 新座市では駅名を新座に変えるように陳情したが、簡単にはいかなかった。JR武蔵野線に新座駅ができたので、新座市は東上線の駅名変更はあきらめた。志木駅近くには慶應大学志木高校があり、南口には長島一茂の出身校立教新座高校がある。

■敷島神社（志木市本町 2-9 細田学園隣）

明治 22 年に館村と引又村が合併して志木町になったが、鎮守は館の氷川神社だった。引又の人達は不満で、浅間神社といくつか稲荷神社を併せて明治 40 年敷島神社とし、自分たちの鎮守にした。敷島神社は本居宣長の「敷島の大和心を人問わば……」からとったものだ。前に私は「敷島神社から志木の名前が出たのでは……」と書いたが、それはまったくの思い違いで、志木町ができて、その後に敷島神社ができたのだ。いい加減なことを書いてゴメンなさい。



■田子山富士

境内の左手に「田子山富士」が築かれている。この塚自体が敷島神社の母体になった「浅間神社」であり、コノハナサクヤヒメを祀っている。東京近郊の大きな富士塚はたいてい土盛りだが、ここのはちゃんと富士の熔岩が積み上げられている。高さは 10m ほどだが、眼下に新河岸川が流れており、そこから見上げると数十mの壮大な高さになりそうだ。



田子というのは「田子の浦ゆ うち出てみれば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りけり」の田子の浦を新河岸川辺に、この富士塚を富士山とみたてたものだという。これも地元で聞いた話だから本当かどうかは、確かめる必要があるけど。

もともとここには古い塚(古墳)があった。引又町の高須庄吉という人がこのあたりを散策中に、富士山で入定した十瀧坊承海の板碑を発見し、多いに感激した庄吉は富士塚を築造することを決心し、賛同者を募って高さ 12m の「田子山富士」を明治 5 年に完成させた。頂上に浅間神社を祀り、この地にも富士講が結成された。と看板には書いてある。

この富士塚には数多くの富士講碑がたっている。都内の石碑は全部が安山岩だったが、ここはさすがに青石塔婆の産地に近いので、小御獄神社の碑は長瀬の青石が使われている。

また 8 月 21 日、お火のまつり と称して火祭りが行われる。これはもちろんコノハ

ナサクヤヒメが産屋に火をつけて三皇子を産んだという故事になぞらえているお祭りだ。次に行く清瀬の中里富士でも火の花祭りが行われる。
ここから志木駅までは歩いて 15 分程度。さらに清瀬までは 5 km ほど。

清瀬 中里富士 火の花祭りで

■清瀬へ

清瀬という名前も古いものではない。もともとは清戸と言った。文京区の護国寺から目白通りに抜ける道が「清戸道」と呼ばれているが、昔は清戸あたりから江戸へ農産物を運ぶ道だったのだろう。ここも 1889 年合併によって清戸と北側を流れる柳瀬川の瀬をとって清瀬と名乗ったらしい。もとは三多摩の一員で神奈川県に属していたが 1893 年に神奈川県から東京府に編入された。しかし長い間「都下」などと称された。私は 35 年前、新設の清瀬高校に勤めていたので、このあたりはのべつ走っていたところなので、けっこう詳しいし、懐かしい。



志木から清瀬へは何本ものバスが出ている。禅寺で有名な平林寺を経由するものもある。一見の価値のあるお寺だろう。志木街道はケヤキ並木でいい道だ。しかし私は田子山富士から清瀬の中里富士までしばしばランニングで行く。志木駅前から少し南に下り、野火止用水の緑道を行くコースだ。交通量の多い川越街道バイパスは専用の陸橋で越える。平林寺の脇の道はすばらしくいい。新座市の運動場を越え、本多のテニス場あたりから産廃の捨て場になっており、かなりの高さの山ができています。ちょっと見るとお富士山にも見えなくもない。私は勝手に産廃富士と名付けているのだが、こんなのアリなのだろうか。地元の人はもっと文句を言えればいいのに。そこから志木街道にでてしばらく行き、ケヤキ通りから少し下ると坂の途中に立派なお富士さんがみえる。

■清瀬 中里富士（清瀬市中里 3-991）

練馬区にも中里富士がある。どちらも立派なお富士山なので、区別するために清瀬の中里富士と呼ぶことにする。地元の人はそれぞれ勝手に中里富士とよぶが、



外の人達にとって紛らわしくて困る。

この富士山には富士の熔岩はまったく使われておらず、赤土の盛り土であり、崩れないように土留めが電光型につけられて、登山道になっている。頂上には10人以上が集まれる広さがあり、石祠と石碑が数基ある。

■ この説明板はけっこう詳しく書いてあるので、書き写しておこう。

市指定有形民俗文化財

中里富士塚 高さ11m 面積約391m²

所在地 清瀬市中里3-991番地

指定日 昭和56年10月1日

富士山を崇め、登山を通じて修業する富士講が江戸時代中期から流行し、各地に富士塚が構築されました。

中里富士講は享保18年(1733年)江戸赤坂善行道山より田無村を経て中里村の先達に「お伝え」が送られ、講が成立しました。以後、武州田無組丸嘉講社の一つとして、代々の先達と口中の努力によって隆盛を見ました。

記録によると、この富士塚は次のようになっている。

- 初代先達の時に富士浅間神社の末社を立つ。
- 文政8年(1825年)御山を再築し、石の宮に改築す。
- 明治7年(1874年)7尺5寸(約2m25cm)高くし、小御獄、身禄、宝永山、頂上薬師、金比羅、小室浅間、鈴原様などを建てる。
- 明治35年(1902年)山を修復し杉、檜苗数十本を植える。

毎年9月1日には盛大な「火の花祭り」(市指定無形文化財)が行われ、講社としての富士講も健在で、信仰の対象としての富士山を今に伝える貴重な富士塚です。

昭和58年3月1日 清瀬市教育委員会

■ 火の花まつり(9月1日)

毎年9月1日に中里富士では「火の花祭り」が行われる。これは本家富士吉田の火祭りに習って行われるものだが、今は盆踊りと一緒に行われている。

もともとの火祭りは、富士山のご神火に加え、祭神コノハナサクヤヒメが産屋に火をつけて猛火の中で三皇子を産んだという故事に由来している。なんでまたそんな恐ろしいことをしたのかといえば、天孫のニギノミコトが大山津見神の娘、木花開耶姫命(コノハナサクヤヒメ)と日向でであい結婚した。ところがニギノミコトに一夜の交わりで妊娠したのを疑われたコノハナサクヤヒメは、その疑いを晴らすために、産屋に火を放った。ニニギの子でなければ無事



には産まれない、ニニギの子ならば無事に産まれると宣言しており、無事に子を産み、疑いを晴らした。このことからコナハナサクヤビメは火の神とされ、浅間神社に祭られるようになった。

その時に生まれた三皇子はホデリ（海幸彦）、ホスセリ、ホオリ（山幸彦）だ。三男の山幸彦は大綿津見神の娘トヨタマヒメと結婚しウガヤフキアエズを産む。しかしトヨタマヒメは正体がワニだったことを知られたために海に帰り、妹のタマヨリヒメがウガヤの世話をする。ウガヤは育ての親のタマヨリヒメと結婚し4人の子どもを設ける。その一人がカムヤマトイワレビコ、初代の神武天皇である。すなわちコノハナサクヤビメは天皇家初代のひいおばあさんということになる。

ここではまだ富士講が健在で、丸嘉講の方々が火の花祭りを取り仕切っている。講の皆さんは富士登山の白装束で大先達さんの指揮の元に、頂上から「お伝え」の経文を唱えながらを、ゆっくり登山道を下ってくる。そして富士山型に積み上げられた麦わらのまわりを何回か回って、頂上に点火する。まるで富士山が噴火したかのように見える。火の粉が飛び散ると、先達さんは柄の長い御幣で集まった人々のお祓いをしてくれる。狭い境内なので、輻射熱で熱い。しかしこの火にあたると無病息災、さらにこの灰を家の周りにまくと、火除け、魔除けになるという。

■中里富士（練馬区大泉町1-44-1）

実は練馬区の大泉、といっても和光市との境にも大きな富士がある。ここの旧名も中里だったので、中里富士といわれる。和光の熊野神社からも歩いて30分ほどで行けるが、今回は下新倉に行ったので、まわるができなかった。しかしいい富士なので、近いうちにご案内します。

■片山富士

こちらは新座市の片山小学校近くの法台寺にあるのだが、公開されておらず、私もまだ行ったことはない。なかなか有名な富士山だったようだが、ご迷惑になるといけないので、口外しない。

■落合富士（東久留米市浅間町）

東久留米の浅間神社にある塚なので富士塚だろう。しかし塚は小御獄神社となっている。でも小御獄神社は富士山の中にある神社なので、富士塚と言ってよいだろう。石碑は丸嘉講となっている。

▲今回はかなり離れた富士をバスや鉄道を使ってまわりましたが、私は半日かけて、歩いたり走ったりして回っています。富士登山をするような気になって気分はいいですよ。目的地に直行するよりも、途中でいろんなもの、例えば産廃富士を発見したりする楽しみもあります。

▲次回は10月1日（月） 足立区の富士塚めぐり 綾瀬駅改札口 10:00 集合
綾瀬富士、五反野富士、島根富士（鷲神社）、花畑富士など回ります。